

アマミクヌムイ（越來グスク）

—国指定名勝「アマミクヌムイ」「ごゑく（越來グスク）」に係る調査報告書—

沖縄県 沖縄市教育委員会

例　　言

1. 本報告書は、国指定名勝「アマミクヌムイ」への越來グスクの追加指定の意見具申に伴い作成した。
2. 沖縄県教育庁文化財課 沖縄県「名勝に関する特定の調査研究事業報告書」「アマミクヌムイ（アマミクの社）－アマミクの琉球開闢伝承地－」（平成27年3月）で報告された「ごあく（越來グスク）」について、国指定名勝への追加指定の意見具申に伴い名称を「越來グスク」とする。
3. 参考とした文献は、文末にまとめて記す。
4. 本調査報告書について、平澤毅氏（文化庁文化財第二課）、上地博氏（沖縄県教育庁文化財課）にご指導、ご助言を頂いた。
5. 本調査報告書の編集及び執筆は、沖縄市教育委員会郷土博物館の島田由利佳、刀禪浩一、繩田雅重、八田夕香、比嘉二規が担当した。
6. 文中の『おもうさうし』の歌詞の表記は沖縄市史編集委員会編『沖縄市史 第二巻 資料編1 文献資料に見る歴史』（沖縄市教育委員会、1984年）の記載に依った。
7. 本調査報告書に使用した現況写真は、沖縄市教育委員会が撮影したものを使用した。また、地図図版背景に用いた空中写真的うち、米軍が1945年2月28日および1945年12月10日に撮影したものは、沖縄県公文書館所蔵の資料を承認を得て掲載し、写真に出典を記した。1962年7月3日に米軍が撮影したもの、1970年5月12日に琉球政府が撮影したもの、1977年12月7日に国土地理院が撮影したもの、1993年9月10日に沖縄県が撮影したものについては、国土地理院所蔵の資料を使用し、写真に出典を記した。その他の航空写真については、沖縄市所有のものを使用した。

目 次

第1章 越来グスクと周辺の環境

第1節 自然的環境	1
地理・地形的特徴	1
第2節 歴史的環境	1
沖縄市の歴史的環境	1
越来グスクの歴史的環境	2
越来グスクにまつわる人物	3
『おもろさうし』と越来グスク	5
戦前の越来グスク	6
第3節 民俗的環境	7
琉球国時代の祭記	7
戦前の祭祀	7
現在の祭祀	8
第4節 社会的環境	8
戦後の越来グスク	8
越来グスクの現在	9
第5節 これまでの調査研究	9

第2章 越来グスクの概要

第1節 越来グスクの風致景観について	11
第2節 主要な構成要素	11
第3節 まとめ	12

第3章 越来グスクと沖縄市

第1節 名勝としての越来グスクの意味	13
第2節 保存活用について	13

参考文献

資料編

文献

(1) 越来グスク関連おもろ一覧	17
(2) 「琉球国之図」(『海東諸国記』より)	18
(3) 安国寺銅鐘の銘(『琉球国由来記』『諸寺旧記』太平山安国寺記より)	18

図版

(1) 越来グスクの位置図	19
(2) 越来グスクの地形と範囲	19
(3) 越来グスクの構成要素	20
(4) 聞き取りを基にした戦前の越来グスク	20
(5) 1919(大正8)年の越来グスク周辺	21
(6) 1945(昭和20)年2月の越来グスク周辺	21
(7) 1945(昭和20)年12月の越来グスク周辺	22
(8) 1947(昭和22)年から1948(昭和23)年頃の越来グスク周辺	22
(9) 1962(昭和37)年の越来グスク周辺	23
(10) 1970(昭和45)年の越来グスク周辺	23
(11) 1977(昭和52)年の越来グスク周辺	24
(12) 1993(平成5)年の越来グスク周辺	24
(13) 現在の越来集落と越来グスク	25

写真

(1) 古写真	26
① 1945(昭和20)年7月頃のウガンムイ(奥左)と越来グスク(奥右)	26
② 1955(昭和30)年から1957(昭和32)年頃、南側から見た越来グスク	26
③ 1955(昭和30)年再建の越来グスクの拝所	27
(2) 現況写真撮影位置	27
(3) 現況写真	28
① 指定候補地全景(城前公園俯瞰)	28
② 越来グスクの高台	28
③ 城前公園入口	29
④ 越来グスクの拝所(ギークスウガンジュ)	29
⑤ 越来グスク出土遺物1 中国産磁器	30
⑥ 越来グスク出土遺物2 刀の鐔、切羽、鎧金具	30
⑦ 越来グスク出土遺物3 意図的に割られた瑞花双鳳八稜鏡片	31
⑧ 越来グスク出土遺物4 石製勾玉	31
⑨ 越来グスクの拝所での祈願(旧暦1月4日の立ち御願、2019年撮影)	32
⑩ 越来グスクの拝所内にある石碑(2019年撮影)	32
⑪ 越來のウスデーク(川畑家前庭、2014年撮影)	33
⑫ 白椿(沖縄市立ふるさと園、2015年撮影)	33
⑬ 越来城下町まつり(2018年10月撮影)	34
⑭ コザ十字路の大壁画「コザ歴史絵巻」(2014年撮影)	34

第1章 越来グスクと周辺の環境

第1節 自然的環境

地理・地形的特徴

沖縄市は沖縄島中央部に位置し、県庁所在地である那覇市から北東に約20kmの距離にある。総面積は49km²、人口142,044人、世帯数61,796世帯（沖縄市人口統計平成30年10月1日現在）である。地形としては、中城湾に面する東海岸部から西北西部の丘陵地へと斜面地域が広がっており、市域の9割は標高100m以下である。

沖縄島の北側と南側では比謝川や天願川をおおよその境界として地質が異なるが、両河川の流域にある本市は沖縄島の北部と南部の地質の境界にあたる。市域の北側は沖縄島北部に広く発達している名護層で、約4,000～7,000万年前に形成された変成岩からなる。南側には沖縄島南部一帯に広く発達する約200～500万年前に形成された泥岩（方言名 クチャ）からなる鳥尻層が見られる。加えて市域中央部（胡屋～知花）には基盤の鳥尻層を琉球層群石灰岩層と砂砾層が不整合に広く覆っている。その地域の特徴的な地形として、石灰岩層の浸食残留地形（円錐カルスト）が列をなして点在する。

越來グスクは、沖縄県沖縄市城前町に所在し、コザ十字路より北西へ約200m、越來小中学校の南側、標高約80mに位置し、琉球層群石灰岩層の浸食残留地形の小丘陵上に形成され、南東に中城湾を望む眺望のよい環境である。南西約150mに沖縄島最大の流域面積を誇る比謝川が流れ、鳥尻層と琉球層群の不整合面の各所から湧水が湧出する。

地質は名護層に由来する國頭マージ（※1）が主体となり、これは比謝川の堆積物と推察される。聞き取り調査によると、元々のグスクは東西約170m、南北約120mの範囲であったが、戦後の開発等により、その大半が失われ宅地化が進行している。わずかにグスクの北西部に旧地形が残るが、一見してグスクの面影を見ることはできない。

※1 「國頭マージ」は土壤の一種。沖縄島中北部・久米島・石垣島などに分布する赤～黄色の酸性土壤。

第2節 歴史的環境

沖縄市の歴史的環境

沖縄市の市域には先史時代の遺跡である室川貝塚や八重島貝塚などがあり、少なくとも約4,000年前から人々が暮らしていたことが分かっている。その後、グスク時代には越來グスクや知化グスクが築かれ、現在の字につながる集落が各地で形成されていったと考えられている。

琉球國時代には、行政区として間切（現在の市町村にあたる）制度がつくられ、沖縄市域の大半は越來間切となつた。1666年には越來間切から与儀・比屋根・西原（現美里）以下15村を分離して美里間切が新設された。

明治政府の誕生から4年後の1872年に琉球國は琉球藩となり、1879年には廃藩置縣によって沖縄縣となつた。1908年の沖縄縣及島嶼町村制の施行によって、それまでの間切が村に改められ、越來村、美里村が生まれた。

1941年からはじまった太平洋戦争の末期、1945年4月には米軍が沖縄島に上陸し、日本軍との壮絶な地上戦が行なわれた（沖縄戦）。戦闘は沖縄島全域で展開され、市街地や農地なども戦闘地域となったこ

とから、一般市民にも甚大な犠牲者と損害が発生した。

沖縄島中北部では、上陸直後の4月の段階で米軍によって民間人の収容所が複数設置されたが、そのうちの一つは越來村嘉間良に1945年4月6日に設立されたもので、胡差地区(CAMP KOZA)と称された。沖縄戦終結後の1945年9月には民間人収容所を中心に急激に人口が増えた地域に市制が敷かれ、越來村は古謝市、美里・具志川一帯と統括されて前原市となった。その後、米軍により移動が許されると人口も減少し、翌年には市制も解かれ、再び越來村、美里村に戻った。

その後、嘉手納基地の建設に伴い、急速に発展した越來村は1956年6月、村名をコザ村に変更し、同年7月に市へと昇格しコザ市となった。さらに本土復帰から2年後の1974年、コザ市と美里村が合併して「沖縄市」が誕生した。琉球国時代に同じ間切だったコザ市と美里村が308年ぶりに再び一つになり、現在に至っている。

越來グスクの歴史的環境

越來グスクは沖縄島中部、沖縄市城前町に所在するグスクであり、地元では「ギイクグシク」と呼ばれている。

越來グスクの築城等について明確な記録はないが、現存する資料では『海東諸國紀』(1471年編集)に収められた「琉球國之図」(1453年作成)に「五欲城」(読み不明)と記されているものが最古である。また、『琉球國由来記』(1713年)の記述によれば、1457年に造られた「安國守銅鐘」の銘には「新たに洪鐘を鋤て、魏古城に寄進した」旨が記されていたという。「五欲城」、「魏古城」(読み不明)は越來グスクを指すと推測される。「安國守銅鐘」は、戦前は首里の安國寺に置かれていたが、太平洋戦争時の戦災で寺とともに焼失し、実物は現存しない。

越來は古くから中部の要地として有力な王子や按司が封じられており、1435年に第一尚氏第六代王「尚泰久」が越来王子として、その後、阿麻和利討伐で功労のあった大城賢雄(鬼大城)は、越来間切総地頭職を拝命、1470年には第二尚氏第二代王「尚宣威」も越来王子に封じられており、彼らは越来グスクに居城していたと考えられている。

その後の越来グスクがどのように使われたかはよくわからない。第二尚氏第三代王尚真の時代には、地方にいた按司は首里に集められ、代わりに役人を派遣して地方を統治させ、按司や王子がグスクに居住することはなくなったと考えられている。1611年には越来グスク北側約250mの場所に越来番所が置かれ、越来間切の行政の中心は番所に移ったと考えられる。近世以降の越来グスクは間切や越来村の年中行事が行われる場所として使われたことが『琉球國由来記』や『琉球國旧記』(1731年)、「越来尋常高等小学校創立五十年記念誌」の記述に見られる。

越来グスク及びその周辺は、1985年・2010年・2011年の計3回、いずれも個人住宅建築に伴い発掘調査を実施している。1985年は約134m²の調査を実施し、掘立柱建物跡や、柱穴、焼土面、袋状ピットなどが検出された。出土遺物は、沖縄貝塚時代後期のフェンサ下層式土器から近世の沖縄陶器まで出土している。沖縄貝塚時代後期の時期までさかのぼることがあきらかとなり、文献資料に登場する以前から人々が活動を始めていたことが分かっている。出土遺物のうち14～15世紀にかけての中国産陶磁器が多数を占め、青磁の水注・酒会壺やベトナム産陶器などが出土している。金属製品として、刀の鍔、

切羽、鏡の金具、刀子、鎌、釘、鏡貨などが出土している。

2010・2011年度に住宅を1棟はさんで、2地点(2010年約300m²、2011年約650m²)の発掘調査を実施した。遺構は、ピット、石列遺構、焼土面、炉跡、土坑、4本柱建物跡、円弧状遺構などが検出された。また、1才前後とされる幼児入骨が7体、成人人骨3体が見つかっている。出土遺物は、青磁、白磁、陶磁器類、鉄製品、青銅鏡片、土器、石器、貝、鉄滓などが出土しており、結晶質石灰岩製の勾玉の未製品やガラス製の玉も出土している。青銅鏡片は8点出土しており、螢光X線分析を実施した。久保智康氏(京都国立博物館名誉館員)の分析・評価によると、瑞花双鳳八棱鏡、双鸞八棱鏡、素文鏡2面の計4面の銅鏡の一部と判断されている。これらは日本の平安時代に製作された瑞花双鳳八棱鏡、中国・唐時代に製作された双鸞八棱鏡、中国・宋から元時代に製作された素文鏡の3種であることが確認された。製作からさほど下らない時期に琉球にもたらされたと想定され、グスク成立以前に、日本の奈良から平安時代の高級工芸品入手しうる経済力をもった勢力が育ちつつあった可能性が指摘されている。

越來グスクにまつわる人物

「越來」の名を冠する人物

個人名ではないが、1609年の薩摩侵攻以前の事象について記述されたと思われる文献や伝承に「越來」あるいは「越來」と考えられる名を冠する人物が見られ、越來地域に対して力を持つ有力者だった可能性が考えられる。

最も古い文献では『明実錄』の洪武二十四(1391)年の記事として、琉球國中山王察度が明國へ朝貢のために遣わした使者のなかに「嵬谷致」(※1)という名が見られる。洪武二十九(1396)年には同じく中山王察度が「隗谷結致」を、永樂二(1404)年には山南王汪応祖が「隗谷結制」を、それぞれ朝貢の使者として遣わした記述がある。さらに宣德二(1427)年、宣德五(1430)年、宣德八(1432)年には中山王尚巴志が「魏古渥削」を使者として遣わした記載がある。「嵬谷」「隗谷」「魏古」(読み不明)と表記に揺はあるが、「越來」に関係する人物である可能性がある。

また、『中山世鑑』には、1422年に「越來按司」が中山王(尚巴志)の命で北山を攻める旨の記述が見られる。「按司」とは、古くは琉球各地の政治的支配者を指す語ともいわれ、「越來按司」は越来にゆかりのある有力者を指しているものと思われる。伝承としては、北山王の子である伊波按司の子が越来按司になったという言い伝えがあり、越来地域をはじめ近隣の集落一帯に北山王に連なる有力者にまつわる伝承が残されている。

そして、『おもうさうし』中では、「ごゑく世のぬし」「ごゑくのてだ」との記述が多数見られ、「ごゑく世のぬし」「ごゑくのてだ」が贊美される歌となっている。「ごゑく世のぬし」「ごゑくのてだ」は、少なくとも越来地域に影響力のある人物であると思われる。

※1 「嵬谷致」について、和田久徳・池谷望子・内田晶子・高瀬恭子『歴代宝案編集参考資料5『明実錄』の琉球史料(一)』(沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室、2001年)では「致の上に結を脱字している可能性がある」との注釈を付している。

尚泰久（1415～1460）

第一尚氏第六代王、在位7年。

第一尚氏第二代王尚巴志の五男。1454年に王位につく。「球陽」では1435年尚巴志が五男泰久を越来に封じ越來王子と為したとの記述があり、越來王子としての尚泰久は越来グスクに居城したと考えられている。

尚泰久は仏教の興隆につとめ、寺や梵鐘を造ったといわれており、そのうちの一つ「安国寺銅鐘」の銘には「魏古城」の名が記されていたと伝わっており、尚泰久王と越来グスクの繋がりを窺わせる。

『中山世譜』には尚泰久が越來領主であった時に「世理体」という名の側室を娶り、世理体が生した男子を江洲按司と称したとの記述がみられる。これに関連した伝承として、越來の川畠家には、尚泰久から下賜されたと伝わる「越來の白椿」が残されている。越来集落に残る言い伝えによれば、宮里集落の娘が尚泰久に見初められて子ができ、越来集落の川畠家にて子を生み育てたという。男子出生の祝いとして尚泰久より川畠家に白椿とみかんの木が贈られたといわれ、戦前まではそれらの樹木が川畠家に残っていた。太平洋戦争での戦災によってみかんの木は喪失し、白椿も戦後、枯れてしまった。現在、川畠家にある白椿は枯れる前に押し木で別の場所に植えていたものを川畠家に戻したもので、今でも時期になると白椿の花を咲かせている。また、この白椿は「越來白球」として品種登載され、椿愛好家にも親しまれている。越來で旧暦8月15日に行われる伝統行事「ウスデーク」も、その発祥を尚泰久側室の男子出産の祝いに結びつける伝承がある。

また、昭和12年頃に越来グスク東側の古墓を調べたところ、「中山世譜」の表記とは異なるが、石棺に「世利休女」と記されていたといわれ、川畠家に昔あった位牌にも「世利休女」の名があったといわれている。

大城賢雄【鬼大城】（～1469？）

喜屋武接司の長男といわれ、母方の沖縄市知花で育ったと伝わっている。越来王子だった尚泰久に兄弟で仕えるようになったといわれ、大柄で武勇に優れていたことから「鬼大城」と呼ばれており、沖縄市には武勇に優れた大城賢雄の姿が伝承で多数伝わり親しまれている。

『球陽』では、大城賢雄は、勝運の阿麻和利に嫁いだ尚泰久王の娘、百度踏揚の臣下だったとされ、後に阿麻和利の反乱の企てを知り、百度踏揚を背負い、首里に逃げ、反乱の企てを父である尚泰久に報告し、大城賢雄を總大将として阿麻和利を滅ぼしたという。そして、大城賢雄は阿麻和利討伐の功績で越来の総地頭職を押し、百度踏揚を妻を迎えたといわれている。

沖縄市大里には「ウガングワームイ」と呼ばれる場所があり、この場所の地名由来として、百度踏揚と大城賢雄が首里に向かって逃げる途中、この地で「御願」（祈願）を捧げたという伝承が伝わっている。

その後、第一尚氏から第二尚氏に代わり、第二尚氏初代王尚円から謀反の疑いをかけられた大城賢雄は沖縄市知花の知花グスクで自害したと伝わっており、その自害の地が現在「鬼大城の墓」とされる墓がある場所だという。墓の脇には1853年に建てられた「夏氏大宗墓の石碑」があり、当地に墓がある経緯等が記されている。

尚宣成（1430～1477）

第二尚氏第二代王、在位6ヶ月。

第二尚氏初代王尚円の実弟。1470年に越えて王子となり、越えて居城したと考えられている。尚円の死後、尚円の子、尚真がまだ幼かったこともあり、第二代王となる。しかし、王としての神託を受けることができず、半年で退位。再び越えてに隠匿し、まもなく死去したといわれている。その後、尚宣威王の長子朝理（尚真王妃の兄弟）は越えて王子となり、その子孫は近世に湧川殿内と名乗り、越えてには湧川門中が拝む「殿内跡」と呼ばれる拝所が今も残されている。

なお、尚宣威王の墓は、沖縄市嘉間良、比謝川沿いの崖中腹に所在する。

『おもうさうし』と越えてグスク

『おもうさうし』は、奄美と沖縄島およびその周辺離島に伝わる『おもう』を採録した沖縄最古の歌謡集である。もっとも古い第一の巻は表書きに嘉靖十年とあることから、1531年に成立したと考えられている。収録されている歌謡『おもう』は12世紀から17世紀頃に歌われた古歌謡であり、時代によって主題は変遷するが、全体としては1609年の薩摩侵攻以前の琉球の社会や文化、祭祀を反映した内容であると考えられる。

『おもうさうし』全二十二巻のうち、第二「中城越えてのおもう」（1613年）は、表題の通り中城と越えてについての歌謡を集めた巻である。そのうちの一首（第二ノ三三）にあまみきよ（アマミク）が越えてあるグスクを造営したことを歌う歌がある。歌は下記の通りである。

「一 ごゑく こてるわに
ゑのち ともおそいや
あまみきよが たくだるぐすく
又 みもの こてるわに」

『沖縄市史 第二巻 資料編1 文献資料による歴史』での解説および現代日本語訳では「越えてのコテルワで、命伴襲い（神女）は（神遊びをし）、アマミキヨがたくみたる城、見物コテルワで」という歌意であると記載されている。

この一首は、創世の神「あまみきよ」の名で太古までさかのほるグスクの由緒正しさを示し、それによつて越えてグスクを賛美したものである。『おもうさうし』では他に伊祖グスクと知念グスクを歌った歌謡（第一ノ一五および第一九ノ三一）のなかに「あまみきよ」によるグスクの造営が歌われており、いずれも「あまみきよ」の関与を歌いおこすことでもって、神話世界からの時間の長さを経たグスクを称える歌謡となっている。このうち伊祖グスクはすでに国名勝「アマミクヌムイ」として追加指定をうけている。

冒頭掲げた歌謡『おもうさうし』第二ノ三三については、「あまみきよ」神話を背景にしていると同時に、祭祀の場としてのグスクを描いた歌である。

「こてるわ」は未詳語であるが、おそらく越えてグスク内にあった聖域を指すと思われる。「ゑのち ともおそいや」の「ゑのち」は『おもうさうし』の中では「いのち」の表記でも現れるが、これは豊かな生命力、あるいは靈力を示す。「ともおそいや」も未詳語であるが、『おもうさうし』の類例からすると神女の補佐、あるいは高位の神女と推測され、いずれにしろ神を祀る人物を指した語である。すなわち、太古から続

く越來グスクの聖域ですぐれて靈力高い人物による祭祀が執り行われる様子を表現した歌と考えられる。

この歌の他に、「おもろさうし」には「ごあくもりぐすく」(二ノ三〇、三二および一四ノ二〇)、「ごあくもり」(二ノ四三および一四ノ二二)、「ごあくあやみや」「ごあくくせみや」(二ノ三一、三四)「ごあくこてるわ」(二ノ三五、三六)という場所の名前が登場しており、それぞれ越來グスク内の聖地を指したものと考えられる。これらあわせて10首の歌謡はほとんどが祭祀の場としての越來グスクを表現し、その靈妙さ、勢威の高さを贅美したものである。

さらに、越來グスクの聖域とその祭祀を歌った一連の歌謡に統いて、「ごあく世のぬし」「ごあくのてだ」を称える歌が続く(二ノ三七から四二)。「ごあく世のぬし」「ごあくのてだ」は少なくとも越來地域に影響力のある人物を意味しているものと思われる。「おもろさうし」第十四にも「ごあく世のぬし」が登場する歌謡が1首あり、「ごあく世のぬし」「ごあくのてだ」を主題とした歌謡はあわせて7首となる。

越來グスクそのものを歌った10首と、越來地域に影響力のある人物の賛歌7首、計17首の歌謡が越來にまつわるものと言える。その数量や歌謡の内容からは「おもろさうし」の歌謡に描かれた時期の沖縄島において越來グスクが勢力のある城主に領有され、格調の高さや由緒をそなえた、存在感のあるグスクであった様子を窺うことができる。

戦前の越來グスク

戦前の越来グスクを語るものは多くない。

古くは、大正時代に泡瀬に海中道路を作る際、越來グスクの石積みが使われたとの話が伝わっているが、史資料はなく、真偽は不明である。1945年2月末の米軍撮影空中写真を見ると、鮮明に越來グスクが残っている様子を見る事ができる。

地元の古老への聞き取り調査では、木々がうっそうと茂っていたが石積みは残っており、グスクから泡瀬の海(中城湾)を見晴らすことができたといふ。

また戦後、沖縄考古学研究の基礎を築いた多和田真淳氏は『沖縄風土記全集 第三卷 コザ市編』の中でも越來グスクについて下記のような記述を残している。

越來城跡は城の發達を知る稀に見る好資料であったが、戦後のどさくさでいつのまにか消え失せてしまった。戦前は木造建築物以外は完全に残っていた。戦後ブルドーザーで城郭がとり払われ、そのまま平均三米から五メートルの所は亀甲形になつておらず、須恵器、宋代の白磁、青磁等がたくさん出土する外、城跡系の種類の赤土器が伴出した。ここはもともと沖縄の中央部における海外貿易の拠点であったことを物語り、ごえく世の主の居城であったことを証明するものである。

この北端の包含層は真黒の廣植土で一メートル以上あつた。そのころの御殿の柱穴が残つていたが、丸柱で、その直径十五厘米位のものであつた。七百年前の越來城は高台にできた集落でまだ城郭はなかつたものと見てよい。ほかの沖縄の城はおして知るべきである。

さらに、1982年発刊『沖縄市の埋蔵文化財』の「(8) 越來グシク」の中で「越來グシクは、切石積であった。切石を取り去ると野面積が現われ、さらに石を取り除いた後には、グシク土器が散乱していた。城跡の北側付近に径30cm程の柱穴が観察され、越來小学校の校門付近では、多量の青磁が出土した」と

多和田氏への聞き取りが記載されている。

山城善三 山城善三原稿・中頭調査(五分冊の三)」「**越米村** 志見川村調査」1956年5月27日調査として、当時の越米グスクの様子や聞き取りとして、戦前の段階で石門ではなく、石垣は残っていたこと、城内に拝所が3ヶ所あったこと等の記載がある。

詳細ははっきりしないものの、少なくとも戦前まで石積みを含む城郭が比較的の良好に残っていたことが分かる。

第3節 民俗的環境

琉球国時代の祭祀

「琉球國由來記」には「越來巫火之神」と「越來城殿」の記述があり、「越來城殿」は現在の越來グスクの拝所内にある「越來城殿」に相当するものと考えられる。当時の供え物の記述が下記の通りみられ、越來村を含む周辺の村も祭祀に関わっていたことが分かる。

麦福德祭之時、花米毫升八合完、
五水五合（按）穗、花米九合完、
五水六合完、看鉢金（越米村
百姓中）穗、花米九合完、五水
三合完（照屋村百姓中）穗、花
米九合完、五水三合完（安慶田
村百姓中）穗、花米九合完、五
水三合完（上地村百姓中）供之。
越来越巫二子祭祀也。

また、現在、旧暦8月15日に越來で行われている「ウスデーク」は、尚泰久の側室となった世利休に男子が誕生した祝いとして始まると地元では伝わっている。

戦前の祭祀

1932年発行の『越来越常高等学校創立五十年記念誌』郷土編、字越来越、越来越にある祭典の項目に、当時の越来越の祭祀の記述が下記の通り記されている。

二月ウマチ一 豊年祭のことで麦一升酒を四合野呂殿内で神に御供へをする
三月ウマチ一 神酒と米一升四合を越前城址に供へる、行事に興る人々は野呂、根人、徒のアンシー等で御輿をかついで越前城趾を出で土地根屋に行つてノリトを挙げ字内の御獄にてもノリトを挙げ次に仲宗根ウガントを挙げ次に仲宗根ウガントの側を通りて安ヶ田を過ぎ越前城趾に帰りて終となる、その時の野呂の服装は白衣を着け曲玉、珠数玉を巻き扇子を持ち頭はさみせんづるにて鉢巻をなす、祭典の時にはオモロを奏す、明治三十七八年頃までは間切長以下番所役員全部参拝せり、

旧暦の3月と5月のウマチーの際には、越來グスクを中心として祭祀が行われている。また1905(明治38)年頃までは、「間切長以下番所役員全部参拝せり」とあり、間切にとっても重要な祭祀であったことが窺える。

現在の祭祀

現在の越來の神行事は「こよなくとうやうかい」が主体となり執り行われている。行事を司るノロ等の神役はおらず、拝み事に精通したカッティと呼ばれる女性が中心となって行われている。共有会が行っている行事は、旧暦1月のタチウガン、8月15日の十五夜ウガンとウスデーク、12月のウガンブトウチであり、それぞれで越來グスク(越來グスクの拝所)を含む越來集落内の拝所が拝まれている。

ウスデークとは沖縄各地に伝わっている女性だけの踊りである。越來のウスデークは尚泰久の側室となつた世利体に男子が誕生した祝いとして始まったといわれている。女性は二重の円を描き、内側の円で踊る人々はチヂミウッチャ(鼓打ち)と呼ばれるリズムを取る役である。現在は高齢女性を中心であるが、かつては若い女性も踊っており、特に未婚の若い女性はカカンと呼ばれる白いひだスカートを着けていた。カカンは、首里から役人が来ていた頃、役人と結婚できるように若くて独身の女性が目立つために着用していたといわれている。

第4節 社会的環境

戦後の越來グスク

1945年4月1日の米軍上陸以降、越來グスクの所在する丘陵はすぐさま占領され、戦中から戦後にかけて壊滅的な被害を受けることとなる。地元の古老への聞き取り調査によると、越來グスクの丘陵は米軍占領後ただちに切り崩され、切り崩した土砂はコザ十字路や泡瀬一帯の道路整備に使用されたといわれる。1945年12月撮影の米軍撮影空中写真を見ると、現在の国道330号線にあたる軍道路がすでに敷かれており、近接する越來グスクが所在する丘陵もその大半が削平されている状況が確認できる。少なくとも1945年内に大規模な地形の変がなされたものと考えられる。

古老の記憶する景観と現況を比較すると、越來グスクが所在する丘陵の大半は10m以上削平されていると考えられる。また、越來グスクには嘉手納基地防衛のための高射砲台陣地が構築され、陣地の周囲にはフェンスが張りめぐらされていたという。その後、1955年には、越來グスクの拝所が造られたことが古写真で確認できる。

1957年にはコザ市の都市道路網総合計画の一環として越來グスクの中央を東西に分断するように南北に道路(現在の市道城前線)が整備されており、同年には城前公民館が建設(現在の建物は1988年築)されている。

終戦から15年が経った1960年、越來グスクは米軍から解放されることとなる。解放後の土地は地主に返還され、当時のコザ市水道局が資材集積所として一時期使用していた。その後、中央を通る市道城前線を境に東側は宅地化が進行し、西側は城前公民館、越來保育所(1974年)、城前公園(1980年)といった公共施設や現在の越來グスクの拝所(1980年)が整備された。

越來グスクの現在

現在の越來グスクは住宅地域となっており、市道城前線を境に東側は全域が宅地、西側には宅地と城前公民館、城前公園が所在する。城前公園の一角には1980年に造られた越來グスクの拝所が見られる。グスク北西側にあたる場所にあった越来保育所は2013年に移転し、現在は更地となっている。一見して当地がグスクであったことは分からぬが、城前公園に越來グスクの説明板や拝所があり、そこにグスクがあったことを窺い知ることができる。

戦中から戦後にかけて壊滅的な被害を受けたものの、現在では城前・越来地域をはじめとした周辺11自治区が中心となり、グスク下の比謝川沿いにおいて「越来城下町まつり」を毎年開催している。

また、2015年には越来グスクの南東約200mのコザ十字路国道330号線沿いに「コザ歴史絵巻」と名付けられた幅200mにおよぶ大壁画が完成した。壁画は「忘れてはいけない歴史と沖縄市のアイデンティティ」をテーマに、主にコザ十字路付近の歴史事象を時代順に描いていくものであるが、その4分の1は15世紀の越来をテーマとしており、越来グスクを思わせる石垣や、尚泰久王をはじめとする越来グスクと縁のある歴史上の人物の絵で彩られている。さらには、この壁画を起点として、越来グスク等を紹介する文化財めぐり「沖縄市史跡まーい」が、沖縄市観光物産振興協会の主催で行われている。

第5節 これまでの調査研究

戦後の沖縄考古学研究の基礎を築いた多和田真淳氏は『沖縄風土記全集』コザ市編』や1982年発刊『沖縄市の埋蔵文化財』の「(8)越来グスク」の中で、越来グスクの戦前から戦後にかけての様子を語っており、当時の越来グスクを知る上で貴重な資料である(前述「戦前の越来グスク」参照)。

1981年には第1次遺跡分布調査を実施され、1982年発刊の『沖縄市の埋蔵文化財』の中に当時の状況及び採集遺物が紹介されている。

1984年には『沖縄市史 第二巻 資料編1 文献資料にみる歴史』が発刊され、越来グスクを含む沖縄市に関する近世から近代にかけての文献記述がまとめられた。

1985年には、個入住宅建設に伴い埋蔵文化財確認調査として試掘調査を実施し、旧地形が残っていると考えられる複数地点で遺物包含層を確認し、グスク時代の地層が残っていることが確認された。同年発掘調査を実施し、グスクの地形残存部分の地形測量調査も実施している。

1988年には発掘調査の成果と越来グスク関連の「おもろさうし」や伝承を総合的にまとめた報告書「越来城」を発刊し、沖縄市立郷土博物館にて、展示会「越来グスク展」が開催された。

2009年『あやみや 沖縄市立郷土博物館紀要 第17号』にて、川副裕一郎氏により「越来グスクに関する聞き取りと若干の考察」として戦前から戦後にかけての越来グスクに関する聞き取り調査が行なわれている。

2010、2011年度にも発掘調査が実施され、その成果も含め2014年には「越来グスクの隆盛」と題して、沖縄市立郷土博物館で展示会が開催されている。

2016年『沖縄市立郷土博物館紀要 第24号 あやみや』にて、久保智康氏(京都国立博物館名誉館員)により「越来グスク出土鏡の意義~蛍光X線成分分析の評価を中心に~」と題して、2010、2011年度の発掘調査で見つかった鏡について分析・評価がなされた。越来グスク出土の青銅鏡は、日本の平安時代

に製作された瑞花双鳳八稜鏡、中国・唐時代に製作された双鸞八稜鏡、中国・宋時代から元時代に製作された素文鏡の3種であることが確認され、製作からさほど下らない時期に琉球にもたらされたと想定される。グスク成立以前に、日本の奈良から平安時代の高級工芸品を入手しうる経済力をもった勢力が育ちつつあった可能性が指摘されている。

2013から2014年度にかけて、文化庁の委託を受けた沖縄県によって「名勝に関する特定の調査研究事業」として『中山世鑑』『おもうどうし』『琉球国由来記』『聞得大君御殿並御城御規式之御次第』に記載されたアマミクの開闢伝承地の調査が行なわれ、その中で越來グスクも「アマミクヌムイ」国名勝候補地の一つとして選定された。

2015年『あやみや 沖縄市立郷土博物館紀要 第23号』にて、井口学氏により「越來グスクに関する文献等目録」と題して、戦後も含め、これまでの越來グスク関連の文献が網羅的に収集されている。同年『沖縄市史 第三巻 資料編2 民俗編 - CD -』にて、越來グスクを含めた民俗調査が報告されている。

2018年『あやみや 沖縄市立郷土博物館紀要 第26号』にて、カニマン鍛冶工房の知名定順氏により「越來グスク出土刀子復元調査」と題し、1985年調査で出土した刀子2点について写真や実測図等から復元品の製作を行ない、その工程や復元作業から見える刀子の特徴等が報告されている。

第2章 越来グスクの概要

第1節 越来グスクの風致景観について

越来グスクは現在、その大半が宅地や公園等、市街地化しており、一見してグスクの面影を見ることができない。そのため、過去の資料や発掘調査の結果、聞き取り等から、越来グスクの往時の姿を捉えていく必要がある。

越来グスクの築城等の記録はないが、現存する資料では『海東諸國紀』(1471年編集)に収められた「琉球國之図」(1453年作成)に「五欲城」(読み不明)と記されているものが「越来グスク」と考えられ、最古と思われる。越来には古くから有力な王子や^{あじ}役司^{がくし}が封じられ、第一尚氏第六代王「尚泰久」^{じょうたいきゅう}が越来王子として、その後、阿麻和利討伐で功労のあった大城賢雄(鬼大城)^{おおじのけんゆう}は、越来間切絶地頭職^{まじつけちゆうしょく}を拝命、第二尚氏第二代王「尚宣威」^{じょうせんい}も越来王子に封じられ、彼等は越来グスクに居城していたと考えられている。

『おもろさうし』には、アマミクが造ったと詠われた歌謡をはじめ、越来グスク及び越来グスクの城主を主題とした歌謡が計17首納められており、その歌謡からは、越来グスクが由緒あるグスクと見なされていたことが伺える。越来グスクの隆盛は、発掘調査成果からも伺い知ることができ、グスク時代の貴重な遺構や遺物が多数見つかっている。

近世以降の越来グスクについて具体的に記した資料は少ないが、『琉球國由來記』や『琉球國旧記』には、越来グスク内にあった「越来城殿」の記載があり、祭祀の場として重要な場所であったことが分かる。戦前までは、石積みの一部が残り、木々がうっそうとしていたといわれ、グスクからは泡瀬の海(中城湾)^{あわせのうみ}が見えたという。

しかし、戦後、米軍により越来グスクの範囲の大半が10m以上削平された。米軍用地から返還されたものは、宅地化が進み、商業施設や、保育所、公園等の公共施設も造られた。

越来グスクの大半が市街地化しているが、北西側の高台部分には旧地形が残り、城前公園に越来グスクの説明板^{はいせんば}があり、グスクがあったことを窺い知ることができる。高台からの景観や拝所は、往時の越来グスクを偲ばせるものである。

第2節 主要な構成要素

○範囲全体

越来グスクは、元々は東西約170m、南北約120mの範囲であった。戦後の開発により大半が破壊され、現在の越来グスクは、中央を南北に通る市道城前線を境に東側は全域が宅地となっている。西側については、宅地は一部で、城前公民館、城前公園が所在する。城前公園の一角には1980年に造られた越来グスクの拝所が見られる。グスク北西側にあたる場所にあった越来保育所は2013年に移転し、現在は更地となっている。

○高台

越来グスクの北西側に位置する。越来グスクの旧地形を残す場所である。地下には遺物包含層が確認されており、遺跡としての越来グスクが残っている場所もある。

○越来グスクの拝所

元々の越来グスク中央部南側、城前公園の一角に位置する。地元では「ギークヌウガンジュ」とも呼ばれ、

祠には「火の神」「越来城殿」と刻まれた石碑が安置されている。越来城殿は、かつて越来グスクの中央あたりにあったといわれている。開発に伴い移設され、現在の拝所は1980年に造られたもので、越来共有会が年3回、大切に拝んでいる。

○周辺の景観

越来グスクは、琉球層群石灰岩層の浸食残留地形に位置し、南側一帯を見渡すことができる。戦前は中城湾が見えたと伝わっている。現在でも高台からは南側を一望することができ、往時を偲ばせる。

第3節　まとめ

越来グスクは、琉球層群石灰岩層の浸食残留地形の標高約80mの小丘陵上に位置し、南側一帯を見渡すことができる。

文献資料によれば、越來は古くから有力な王子や按司が封じられており、越来グスクは歴史的に見て沖縄島中部の要所であったことが窺える。戦後も基地の街として、中部で重要な場所であったがゆえに、越来グスクの大半が破壊されてしまうこととなった。この越来グスクが失われた過程は、戦中戦後、急速に開発が進み、その姿を大きく変えた沖縄市の歴史の縮図のようである。

しかし、越来グスクは、今もなお地域の人々の重要な拝所であり、越来グスクがあった丘陵地の大半は失われたものの、拝所や高台からの景観は、越来グスクの聖地としての風致景観を今に伝えている。

また、越来グスクは、アマミクの造ったグスクとして重要な伝承地でもあり、沖縄県による「アマミクヌムイ（アマミクの杜）－アマミクの琉球開闢伝承地－」の名勝に関する調査では、国名勝の候補地として選定されている。

第3章 越来グスクと沖縄市

第1節 名勝としての越来グスクの意味

これまでの越来グスクの利活用については、主に文献資料や発掘調査成果の紹介を郷土博物館等で行なってきた。現地のグスクにおける活用については、一見してグスクだということが分かりにくいこともあり、文化財担当主催の文化財めぐり等の限定的なものであった。

沖縄市の沖縄市都市計画マスター・プランにおいては、越來グスク周辺地域（中部南ゾーン）の「景観まちづくりの方針」として越來グスク整備及び歴史的・文化的資産の活用が明記され、また沖縄市観光振興基本計画においても、観光資源の一つとして越來グスクが記載されているものの、具体的な利活用案は示されていない状況である。

しかし近年では、城前・越來地域をはじめとした周辺11自治会が中心となって、毎年「越來城下町まつり」が開催されるようになり、また越來グスク南東の国道330号線沿いには、越來グスクにちなんだ絵も含む「コザ歴史絵巻」と名付けられた大壁画が描かれている。そして、この壁画を起点として、越来グスク等を紹介する文化財めぐり「沖縄市史跡まい」が、沖縄市観光物産振興協会の主催で行われている。様々な地元団体が越来グスクに注目し、越来グスクを中心として地域おこしや街おこしをしていくこうという機運が高まっている。

越来グスクは、琉球国時代に編纂された文献に琉球開闢神話に登場する創世神であるアマミクが造つたとされる11地域に所在する13の御嶽・グスクの一つでもあり、名勝アマミクスムイの追加指定の候補地でもある。

今後、名勝として指定を受けることによって、遺跡としての保護や景観の保全ができるることはもちろんのこと、名勝指定をきっかけに、越来グスクを沖縄市のシンボルとしたまちづくりや様々な利活用等が成されていくものと考えられる。

第2節 保存活用について

越来グスクの保存活用については、名勝「アマミクスムイ」を構成する文化財を有する他の市村と連携を図りながら、今後、保存活用計画書を策定したいと考えている。計画の策定に当たっては、必要と考えられることとして、各構成要素等の保護に係る詳細な現況の確認や、整備事業に必要な情報の取りまとめ、また、活用に資する整備に関する情報収集等が挙げられる。

保護について、都市公園の部分については、今後、改修等も予想される。また、拝所も含め、今後の公園整備の手法や手続きについては、市の公園担当部局や越来共有会と連携を図りながら、検討等を行なっていく。高台部分の整備については、今後、地域の意見も聞きつつ検討ていきたい。

活用に関して、一般的に「越来グスク」の名称は知られているものの、大半が失われ、見える形で残つておらず、その場所や価値がまだまだ周知されていないのが現状である。そのために、まずは地域への周知を進みたいと考えている。

さらに観光客向けにPR等を行ないたいが、現状は住宅地域内で駐車場もなく、課題も多い。今回の指定を機に、地域をはじめ多くの方に周知し、文化財保護と地域住民の生活、観光も含む利活用について共存できるよう検討し、名実ともに地域のシンボルとして保存活用を図りたいと考えている。

参考文献

- ・山城善三「越來村 具志川村調査」『山城善三原稿・中頭調査（五分冊の三）』浦添市立図書館沖縄研究室所蔵資料、昭和 30（1955）年代 ※正確な年代不明
- ・平田嗣一「美里村史」美里村役所、1962 年
- ・仲程正吉編『沖縄風土記全集 第三巻 コザ市編』沖縄風土記刊行会、1968 年
- ・コザ市編『コザ市史』コザ市、1974 年
- ・新垣徳祐「沖縄の城跡」新報出版、1982 年
- ・沖縄市教育委員会編『沖縄市の埋蔵文化財 遺跡分布調査報告書』沖縄市教育委員会、1982 年
- ・沖縄県『土地分類基本調査 沖縄本島中南部地域「那覇」「沖縄市南部」「糸満」「久高島」5 万分の 1』沖縄県、1983 年
- ・沖縄市史編集委員会編『沖縄市史 第二巻 資料編 1 文献資料に見る歴史』沖縄市教育委員会、1984 年
- ・「越來尋常高等小学校創立五十年記念誌」（※原資料は 1932 年に刊行。「越來小学校創立百周年記念誌 白椿」（沖縄市立越来小学校、1987 年）資料編に復刻版を収録）
- ・沖縄市教育委員会編『越來城 個人住宅建設に伴なう記録保存調査及び範囲確認調査報告書』沖縄市教育委員会、1988 年
- ・沖縄市役所広報課『沖縄市制 15 周年記念写真集』沖縄市役所、1989 年
- ・松田浩「沖縄の椿 鉢植えと庭植えのすべて」沖縄ツヅクと椿の会、1991 年
- ・沖縄県『土地分類基本調査 沖縄本島中北部「金武」「沖縄市北部」5 万分の 1』沖縄県、1992 年
- ・地図資料編纂会編『大正・昭和 琉球諸島地形図集成』柏書房、1999 年
- ・和田久徳・池谷望子・内田晶子・高瀬恭子「歴代宝案編集参考資料 5 『明実錄』の琉球史料（一）」、『沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室』、2001 年
- ・沖縄市立郷土博物館編『沖縄市の遺跡－第 2 次分布調査報告書－』沖縄市教育委員会、2002 年
- ・沖縄市立郷土博物館編『越來グスク』沖縄市立郷土博物館、2007 年
- ・沖縄市立郷土博物館編『沖縄市の伝承をたずねて 中北部編』沖縄市教育会、2007 年
- ・沖縄市総務部総務課編『沖縄市史 第 4 卷 自然・地理・考古編－地理・考古編－』沖縄市役所、2008 年
- ・沖縄市総務部総務課（市史編集担当）編『KOZA BUNKA BOX 第 4 号』沖縄市役所、2008 年
- ・川副裕一郎「越來グスクに関する聞き取りと若干の考察」「あやみや 沖縄市立郷土博物館紀要 第 17 号」沖縄市立郷土博物館、2009 年
- ・沖縄市役所建設部都市計画担当『沖縄市都市計画マスタープラン』沖縄市役所、2010 年
- ・越來共有会編『沖縄市 越来字誌』越來共有会、2010 年
- ・比嘉清和・島田由利佳「調査速報 越来グスク発掘調査の概要」「南島考古だより」沖縄考古学会、2012 年
- ・沖縄市立郷土博物館編『第 40 回企画展図録 越来グスクの隆盛～失われた歴史と創る未来～』沖縄市立郷土博物館、2014 年
- ・沖縄市役所総務部秘書広報課編『2015 年 沖縄市市勢要覧』沖縄市役所、2015 年
- ・井口学「越來グスクに関する文献等目録」「あやみや 沖縄市立郷土博物館紀要 第 23 号」沖縄市立郷

土博物館、2015 年

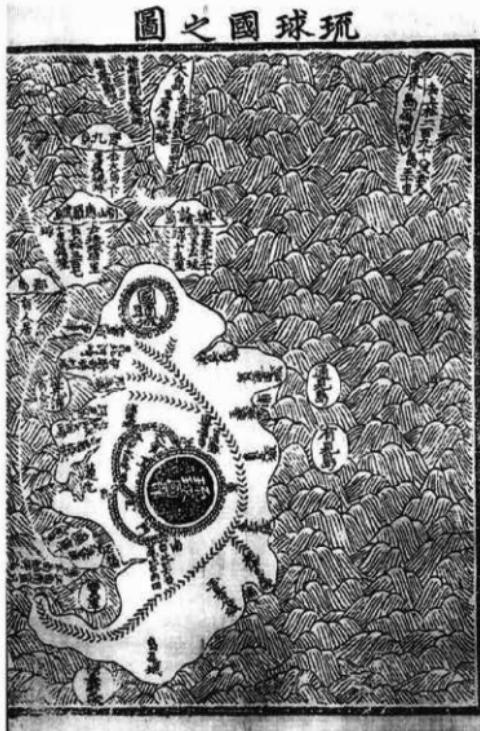
- ・沖縄市総務部総務課市史編集担当『沖縄市史 第三巻 資料編 2 民俗編 - CD 編 -』沖縄市役所、2015 年
- ・沖縄県教育庁文化財課編『アマミクスムイ（アマミクの社）－アマミクの琉球開闢伝承地－』沖縄市教育委員会、2015 年（平成 26 年度 沖縄県「名勝に関する特定の調査研究事業報告書」）
- ・沖縄市商工振興課編『コザ十字路歴史絵巻解体新書』沖縄市、2015 年
- ・沖縄市立郷土博物館編『沖縄市の自然 やんばるの入口』沖縄市立郷土博物館、2016 年
- ・久保智康「越來グスク出土鏡の意義～螢光 X 線成分分析の評価を中心に～」『あやみや 沖縄市立郷土博物館紀要 第 24 号』沖縄市立郷土博物館、2016 年
- ・沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史 各論編 第六巻 沖縄戦』沖縄県教育委員会、2017 年
- ・沖縄市役所経済文化部観光振興課『沖縄市観光振興基本計画』沖縄市役所、2017 年
- ・知名定順「越来グスク出土刀子復元調査」「あやみや 沖縄市立郷土博物館紀要 第 26 号」沖縄市立郷土博物館、2018 年
- ・沖縄県浦添市教育委員会編『伊祖グスク－国指定名勝「アマミクスムイ（アマミクの社）」に係る調査報告書－』沖縄県浦添市教育委員会、2018 年

資料編：文献

- | | | |
|----|-----------------------|---|
| 1 | うらおぞいおもろのふし (二ノ三〇) | 一 ごゑくもりやすく
しきじよつわや
わらひ |
| 2 | うらおぞいおもろのふし (二ノ三一) | 一 ごゑくあやみや
もちなちや
くもり |
| 3 | ねいしまいのふし (二ノ三二) | 一 ごゑくもりやすく
おみやつぢ
なむの ちやる |
| 4 | うらおぞいおもろのふし (二ノ三三) | 一 あがるもりやすく
あがる |
| 5 | うらおぞいおもろのふし (二ノ三四) | 一 ごゑくあやみや
このみち
しおのくわわる |
| 6 | うらおぞいおもろのふし (二ノ三五) | 一 あがるもりやすく
あがる |
| 7 | うらおぞいおもろのふし (二ノ三六) | 一 あがつぢにせはやせ
やうかさの おやのろ |
| 8 | 中やくおもろのふし (二ノ三七) | 一 いそく 世のぬし (二)
まなまもん なしよわかへ
これど かほうてだ
いゑくの あらぎやめ ちょわれ |
| 9 | うらおぞいおもろのふし (二ノ三八) | 一 あんのづのけたちだやればがふ
あんのづのけたち
あんの おけたち
たるです きちやれ
けおの よかるひに
けおの さやがるひに
おやのろ おやのろ |
| 10 | うらおぞいおもろのふし (二ノ三九) | 一 いそく 世のぬしの
わしのみね ちよわち
いみからん
いしきは |
| 11 | うらおぞいおもろのふし (二ノ四〇) | 一 あがる 世のぬしの
あがるもりやすく
あがる おみやつぢ
なむのくわわる |
| 12 | うらおぞいふし (二ノ四一) | 一 いそく 世のぬしの
つみみのあち なりがなし
ふくに うつよせられ |
| 13 | あんのづのけたちだやればがふ (二ノ四一) | 一 あんの づのけたち
あんの おけたち
たるです きちやれ
けおの よかるひに
けおの さやがるひに
おやのろ おやのろ |
| 14 | うらおぞいふし (二ノ四二) | 一 いそく 世のぬしの
みやかわせ
あがなが
ちよわより
こが きよひ
きみやら
ひがのうみ
みよわら
しこなみや
ひがのうみ |
| 15 | うらおぞいふし (二ノ四三) | 一 いそく 世のぬしの
みよわら
あがるもり みやあげれば
あがる おやのろ |
| 16 | チーノナシ (二ノ四四) | 一 いそく 世のぬしの
ひつまたは ひつまたは
かみしの
みもんする 郷くら
又 あがる 世のぬしの
おやのろ おやのろ |
| 17 | おらおぞいふし (二ノ四五) | 一 いそく 世のぬしの
おやのろ おやのろ
いみやからん
御さけや
まざる |

「沖縄市史 第二巻 資料編 I 文獻資料に
みる歴史」より抜粋

(1) 越来グスク関連おもうろ一覧



※部分の拡大

(2) 「琉球国之図」(『海東諸国紀』より)

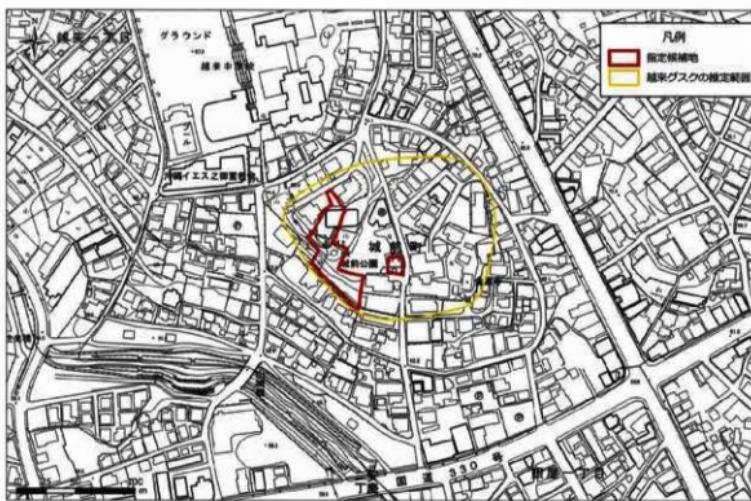
琉球国	鐘銘
銅鐘一口。景泰七年丙子、九月廿三日、相 国二世溪隱、為之銘也。銘曰。	
王大世主 (庚寅) 慶生、茲量 ^三 大慈願海、 而新鑄 ^三 洪鐘、寄捨巍古城。上祝 ^万 歲 之寶位、下濟 ^三 界之群生。辱 ^レ 命相國 安瀧、其銘曰。	
華鍾鑄就 正誠天心 彰兔氏德 流妙法音 奉行 ^(花城・大城) 大工 天順元年十二月九日	掛着殊林 君臣道合 起追巖吟 万古皇沢 摧破昏夢 奪夷不侵

(3) 安国寺銅鐘の銘 (『琉球国由来記』『諸寺旧記』太平山安国寺記より)

資料編：図版



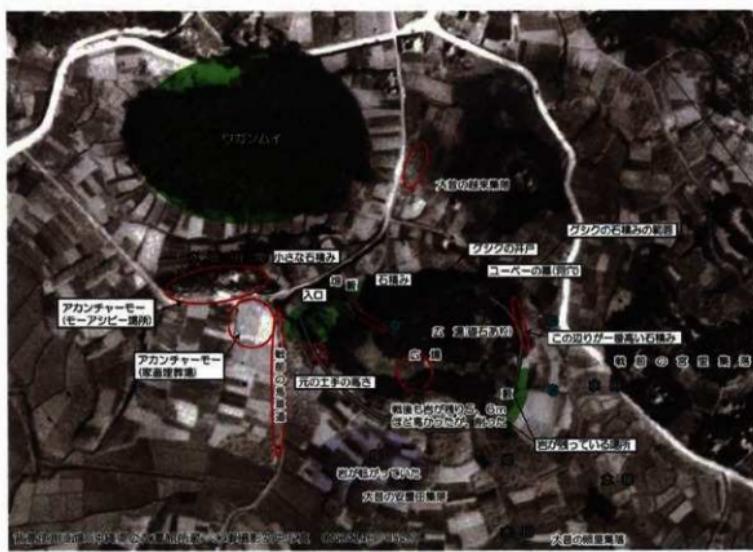
(1) 越来グスクの位置図



(2) 越来グスクの地形と範囲



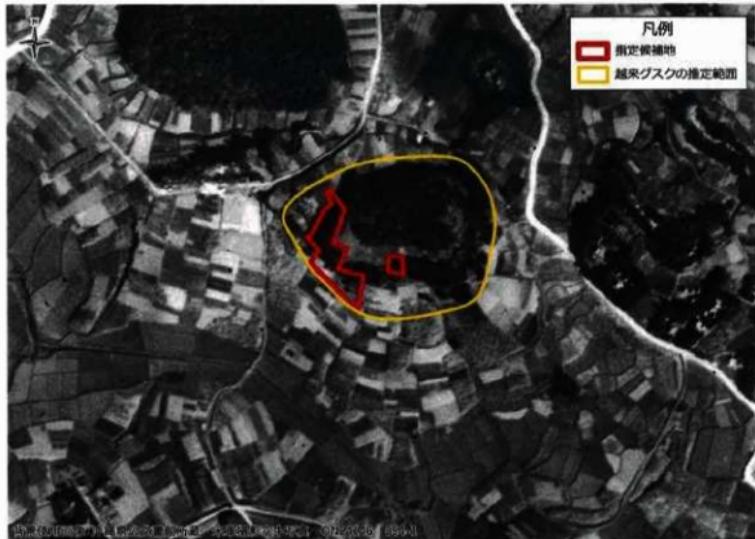
(3) 越来グスクの構成要素



(4) 聞き取りを基にした戦前の越來グスク（2014年『越來グスクの隆盛』より）



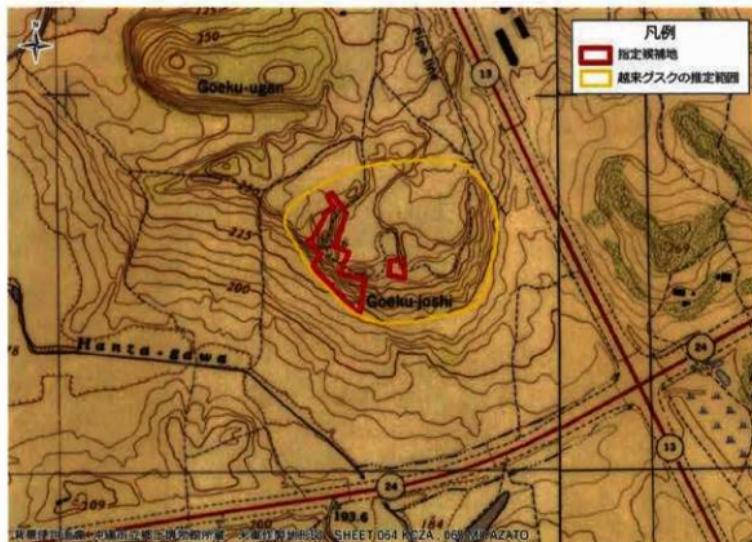
（5）1919（大正 8）年の越米ガスク周辺



（6）1945（昭和 20）年 2月の越米ガスク周辺



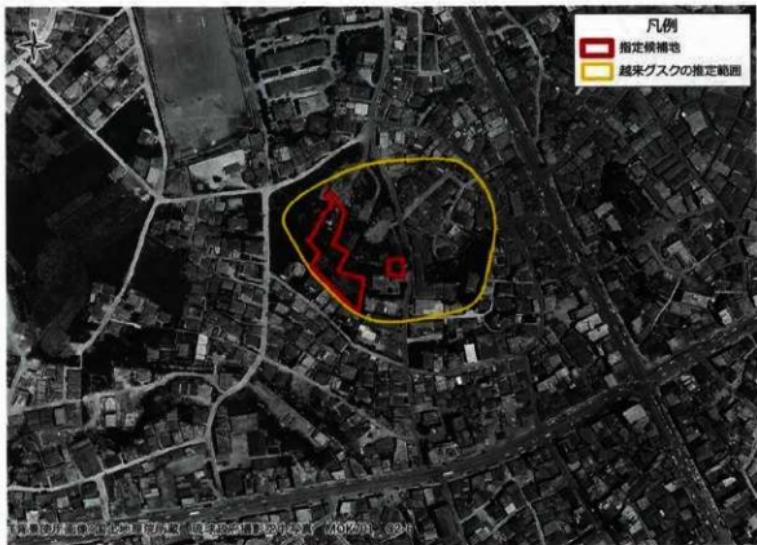
(7) 1945(昭和20)年12月の越来ヶ塚周辺



(8) 1947(昭和22)年から1948(昭和23)年頃の越来ヶ塚周辺



(9) 1962 (昭和 37) 年の越来グスク周辺



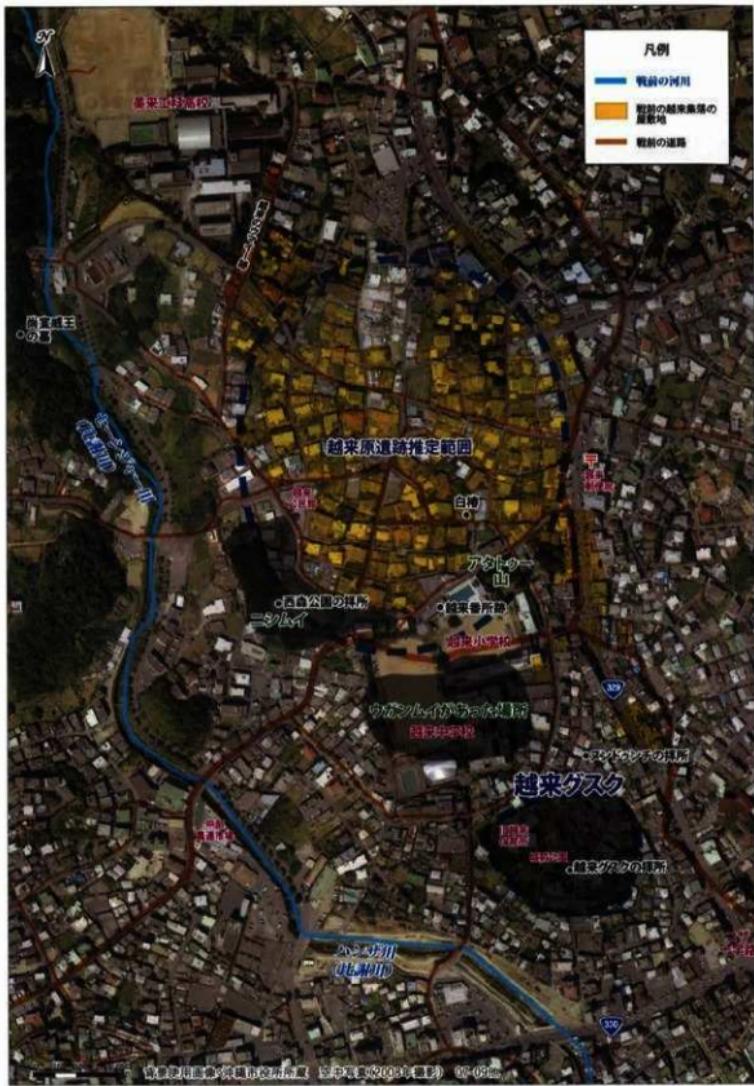
(10) 1970 (昭和 45) 年の越来グスク周辺



(11) 1977（昭和 52）年の越來グスク周辺



(12) 1993（平成 5）年の越來グスク周辺



(13) 現在の越來集落と越來グスク（2014年『越來グスクの隆盛』より）

資料編：写真

(1) 古写真



西原山郷村編「沖縄古風写真集『さくらの時代』」(1979年、那覇出版社発行) 48ページより

① 1945（昭和 20）年 7 月頃のウガンムイ（奥左）と越來グスク（奥右）



沖縄市役所「沖縄市郷土資料写真集」(1989年、沖縄市役所発行) 108ページ、109ページより

② 1955（昭和 30）年から 1957（昭和 32）年頃、南側から見た越來グスク



沖縄共有会編『沖縄市越來字其山』(2010年)、沖縄共有公発行、335頁より

③ 1955（昭和 30）年再建の越来グスクの拝所

（2）現況写真撮影位置



(3) 現況写真



①指定候補地全景（城前公園俯瞰）



②越來グスクの高台



③城前公園入口



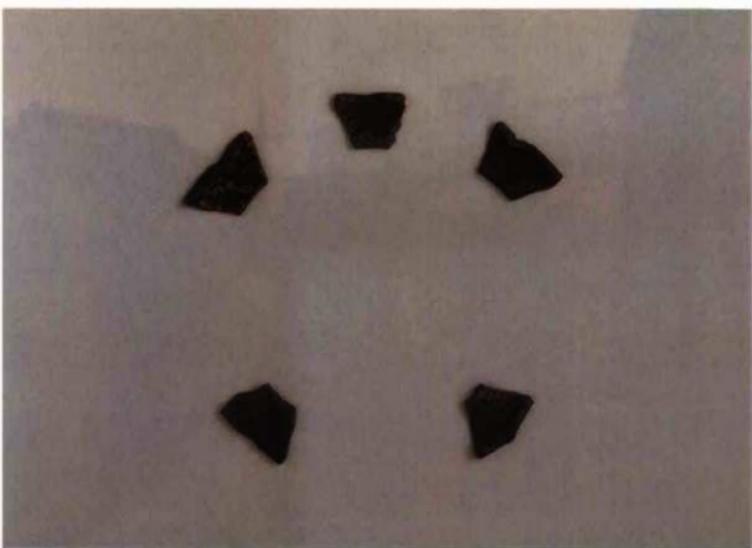
④越來グスクの拝所（ギークヌウガンジュ）



⑤越來グスク出土遺物 1 中国産磁器



⑥越來グスク出土遺物 2 刀の鈸、切羽、鎧金具



⑦越來グスク出土遺物 3 意図的に割られた瑞花双鳳八稜鏡片



⑧越來グスク出土遺物 4 石製勾玉



⑨越來グスクの拝所での祈願（旧暦1月4日の立ち御願、2019年撮影）



⑩越來グスクの拝所内にある石碑（2019年撮影）



⑪越來のウスデーク (川畠家前庭、2014年撮影)



⑫白椿 (沖縄市立ふるさと園、2015年撮影)



⑬越前城下町まつり（2018年10月撮影）



⑭コザ十字路の大壁画「コザ歴史絵巻」（2014年撮影）

沖縄市文化財調査報告書第 45 集

アマミクヌムイ（越來グスク）

国別定名跡「アマミクヌムイ」「ごゑく（越來グスク）」
に係る調査報告書

平成 31（2019）年 3 月 29 日発行

発 行 沖縄県沖縄市教育委員会

編 集 沖縄市立郷土博物館
〒904-0031
沖縄県沖縄市上地 2-39-6
tel:098-932-6882

印 刷 コザ印刷所
沖縄県沖縄市東 1-4-18
tel:098-937-5015

